

「三報恩傳奇」に於ける改作傾向について

—「老門生小説」との比較より見た—

荒木 猛

はじめに

知られる通り、明末清初には、戯曲と小説の両ジャンルで活躍する作家が多く現れた。そうした作家としては、馮夢龍や凌濛初・李漁・丁耀亢らが挙げられる。これととともに話本小説を素材として戯曲を作る傾向もでてきた。

例えば、明末蘇州の人李玉は沢山戯曲を作ったが、その多くが馮夢龍の編んだ「三言⁽¹⁾」に取材するものが多いことが知られている。まず、その「人獸関」劇は、「通言」巻二十
五より、「占花魁」劇は、「恒言」巻三より、「風雲会」劇は、「通言」巻二十一より、「太平
錢」劇は、「明言」巻三十三より、「眉山秀」劇は、「恒言」巻十一と「通言」巻三より
取材している。また、この李玉と交友関係にあった朱素臣も、その作った「文星現」劇
は、「通言」巻二十六より、「十五貫」劇は、「恒言」巻三十三より取材している。まこと、
かつて鄭振鐸氏が言った通り、「明清之際、伝奇作家每喜取材於話本⁽²⁾」である。

では、明末清初の戯曲作家は、話本小説をどのように改作して戯曲を作ったのである

うか。今これを「通言」巻十八老門生三世報恩小説に基づいて作られた戯曲「滑稽館新編三報恩伝奇」について考えてみたい。

一、「老門生小説」と「三報恩伝奇」の成立

老門生小説は、「警世通言」に収められている。「通言」の刊行年は、その現存本中最も古い刊本とされる兼善堂本冒頭にかかげる無碍居士⁽³⁾の序から、天啓四年（一六二四）であるとされる。従って、老門生小説は、当然それ以前に書かれたものと考えられる。

そして、この小説は、「三言」の中で唯一馮夢龍の創作物と考えられているので、この天啓四年は、馮夢龍は五十一歳であるから、この小説は、彼がそれ以前に筆を取ったこととなる。

さて、この老門生小説をもとにして何篇か戯曲が作られたようだが、今判明しているのは、一、馮夢龍の崇禎十五年（一六四二）の序のついた畢魏作の「滑稽館新編三報恩伝奇⁽⁴⁾」と、二、撰者不明の「玉瑒縁」の両種である⁽⁵⁾。このうち二の「玉瑒縁」伝奇は現存しないが、「曲海総目提要」巻十六に、明末の人の作で老門生小説を改編したものと、その梗概が載せられているので、この「曲海総目提要」が作られた康熙末年にはまだこの曲本が存在したようである。ところで、「曲海総目提要」の梗概から判断するに、この「玉瑒縁」伝奇も老門生小説から想を得たもののようだが、「三報恩伝奇」と比べて、その筋展開の点から言って、小説から大部離れており⁽⁶⁾、そもそもその曲本自体が現存しないので、本考では、これを考察の対象外とする。

一方の「三報恩伝奇」は、北京図書館に一本蔵するのみだが、一九五五年の古本戯曲叢刊第二集に収められ、更には近年、魏同賢主編「馮夢龍全集」(上海古籍出版社一九九三年刊)に収められたので、容易にこれを見ることが出来る。

「三報恩伝奇」成立のいきさつについては、その冒頭につけられた馮夢龍の序より窺える。

余向作「老門生小説」、政謂少不足矜、而老未可慢。為目前短算者開一眼孔。滑稽館万後氏取而演之為「三報恩伝奇」、加以陳名易負恩事、与鮮于老少相形。令貴少賤老者渾身汗下。(中略)万後氏年甫弱冠、有此奇才異識、将来豈可量哉。(以下略)

崇禎壬午季夏古吳詞奴龍子猶題墨憨齋中

崇禎壬午の年とは、崇禎十五年(一六四二)のことで、この序を書いた時、馮夢龍は既に六十九歳であつた。一方序の中で万後氏とあるのは、この「三報恩伝奇」の作者畢魏のことで、年甫弱冠とあることから、この時彼は二十歳だつた。馮夢龍にしてみれば孫のような年齢である。その孫のような青年に対して「こんなに若いのに、すでにこんな驚くべき才能知識を具えている、将来どんなに秀れた人間になるか想像もつかない。」と褒めちぎっている。畢魏もまた郷里の偉大なる先輩として馮夢龍を尊敬していたらしいことは、「三報恩伝奇」に識された「姑蘇第二狂」というペンネームからも窺える。馮夢龍のペンネームは、沢山あるが、その一つに「姑蘇詞奴」(「万事足」伝奇叙に見える)があるので、恐らく畢魏は、「姑蘇第一狂」を馮夢龍と見立てて、それに大いに敬意を払

って、自らを「姑蘇第二狂」と号したものと思われる。

畢魏の生涯については、ほとんど分かっていない。崇禎十五年で二十歳なら、天啓二年（一六二二）あたりの生まれで、江蘇呉県の人である。字を万後・万侯、号を晋卿と称し、その室名を滑稽館と称した。清・高奕の「新伝奇品」には、彼の作った戯曲として、一、紅芍薬・二、竹葉舟・三、呼盧報・四、三報恩・五、万人敵・六、杜鵑声の六種の名前が挙げられているが、現存するのは、二の竹葉舟と四の三報恩のみで、その他は、今の所伝わっていない。二の竹葉舟伝奇は、三報恩伝奇と同じく北京図書館に蔵され、また同じく「古本戯曲叢刊」第二集に収録されている。晋の石崇の話を戯曲化したものである。「新伝奇品」では、彼の作品を、「白壁南金、精彩眩目」（白玉のように品德のある優秀な南の人材で、その詞曲の精彩なこと目が眩むほど）と、最大限の賛辞で褒めている。

三報恩伝奇は、全三十六齣からなり、第一齣から第十八齣までが巻上、第十九齣から第三十六齣までが巻下となっている。巻上巻下の冒頭には、二行にわたって姑蘇第二狂筆・同邑龍子猶竄とあることから、畢魏の原作に馮夢龍が手を加えたものであることがわかる。

ところで、所謂「墨憨齋定本伝奇」として現存するもの十六種の中に、この三報恩伝奇が入っている。その十六種のうち「双雄記」と「万事足」の二伝奇のみ馮夢龍原作の戯曲で、その他の十四劇は、三報恩伝奇も含めてすべて他人の原作に馮夢龍が何らかの手を加えたものである。

では三報恩伝奇に関し、畢魏の原作に馮夢龍はどこをどのように手を加えたのである

うか。また、馮夢龍は沈璟を筆頭とする呉江派に属し、戯曲制作にあたっては、實際の上演を考えなによりも曲律を重視したとされる⁽⁷⁾が、馮夢龍が手を加えるにあたって畢魏の原作の曲に何らかの手を加えたか否か、残念なことに現在畢魏の原作が残っていないので、これらの点に関し確かめようがない。従って本考では、以下は畢魏の原作に馮夢龍が何らかの手を加えた現存伝奇の一つのものとして扱うこととしたい。

二、「老門生小説」と「三報恩伝奇」の梗概

老門生小説（以下これを、小説と略称する）を材料として三報恩伝奇（以下これを、戯曲と略称する）はどう作られているかを考察するにあたって、小説と戯曲それぞれの梗概をまず見ておきたい。

まず、老門生小説の話というのは、次のようなものである。

明の正統年間のこと、広西桂林府興安県の秀才鮮于同は、幼時より学識がありながら、なかなか科挙に及第できなかった。そして五十才を過ぎてもなお学生の身分のままであった。彼が五十七歳の時郷試の予備試験である録科を受験するが、この時の試験管は、若者好き老人嫌いである有名な台州府仙居県知県の蒯遇時であった。ところが、この時蒯試験管は、心ならずも老人である鮮于同を一番で合格させてしまう。これ以降これまた自分の意に反して郷試・会試においても同を合格させてしまう。かくて鮮于同が進士となつたのは、六十一歳の時であった。科第をはたした鮮于同は、まず刑部主事に任ぜられ、時の大学士劉吉に逆らって刑部獄につながれていた蒯公を救ったことを手始めに、台州

府知府としては、蒯公の息子の蒯敬共の無実の罪を解決し、浙江巡撫の時には、孫の蒯悟を教育して進士に及第させるなど三世にわたって門生として蒯公の恩に報いた。かくて、官途を歴任すること三十三年で退休し、九十七歳の長寿をまっとうして卒したというもの。

では、三報恩伝奇はどうかと言えば、以下の通りである。

主役の鮮于同は、幼い時より神童と称されたが、どうしたわけか、何度受験しても科挙に合格できず、五十七歳の現在もまだ学生のままである。ある日思い余った彼は、扶乩降仙の術で知られた飛昇觀に行き、自分の将来を占ってもらう。そこで、觀主の体に乗移った呂祖仙の示す七絶の偈を受け取って帰る。(以上四齣まで)

その頃、鮮于同の住む興安県の知県は、蒯遇時という人であったが、この人には、若い秀才のみ可愛がり、年寄りの学生を馬鹿にするという悪い癖があった。ところがこの蒯公は試験官として心ならずも科挙の予備試験と科挙の第一関門の郷試において、二度も自分が忌み嫌っていた老学生たる鮮于同を合格させてしまう。ただこの時蒯公の唯一の慰めは、郷試で同のほかに弱冠十九歳の陳名易という自分好みの青年を合格させたことであった。そこで蒯公は、ひたすら陳名易の将来を期待する。(以上十四齣まで)

間もなく興安県知県より都の礼部給事中の榮転した蒯公は、会試の試験官として再び鮮于同と陳名易の答案を見なければならぬ羽目になった。だが彼は、一つには鮮于同ともうかかわりたくないという思いと、今一つにはなにがなんでも陳名易を合格させたいという気持ちから、会試試験官の同僚に採点科目を変わってもらい、かつまた答案の末尾にかねて陳名易と申し合わせてある符丁をその同僚に教え、これを書き込んである答

案をぜひ合格させてほしいとたのむ。

ところが、なんと鮮于同は、会試受験の前に見た奇夢の縁起をかついで、受験科目を変更し、郷試で受けた科目「礼記」を、今度は「詩経」に改め受験していた。皮肉にも蒯公はまたしても自らの手で鮮于同を合格させてしまう。(以上二十齣まで)

進士となった鮮于同は刑部主事、陳名易は工部主事を拝命する。その頃内閣大学士の劉吉は、自分をしきりに弾劾する蒯遇時を不快に思っていたところ、家では、娘婿のその蒯遇時の門生の陳名易とする話がもちあがっていた。そして陳名易は劉大学士の娘婿に納まる。娘婿となった途端陳名易は、奸計を劉吉に示して、自分を抜擢してくれた恩に背いて座主の蒯遇時を刑部獄に投獄する。だが幸いにも鮮于同の刑部主事としての必死の尽力により、蒯公は釈放され、四川華陽県の典吏という地方の小官に左遷される。

ところで、蒯公には蒯楽というドラ息子がいいて、勉強嫌い遊びすきで、博打をうつは廓に通うはであった。このことを知った劉吉と陳名易は、この蒯楽が良家の娘を手籠にしたり、良家の子弟を博打に誘ったなどと、根も葉もないことで台州府牢につなぐ。しかし、この時の台州府知府が鮮于同であったので、彼がその冤を晴らし、蒯楽を釈放する。(以上二十九齣まで)

同の息子の鮮于俊は、科挙に合格の後、内閣大学士劉吉と組んでいつも悪事を働いた太監汪直の大罪十二を弾劾しつつ、蒯公の冤謫の件を上奏したところ、ともに認められる。更に彼自身翰林院簡討に抜擢される。その後俊は蒯公の孫の蒯悟の学問を見るや、自分の息子榮とともにこの蒯悟も科挙に合格する。

一方、鮮于同は、すでに巡撫の任にあったが、歳も八十を超え高齢を理由に、ある日

退官を願ひ出てこれが認められる。

後に聖旨が下り、鮮于同には太子少保の位が加えられ、息子の俊は翰林院侍読学士、孫の榮は内閣中書にそれぞれ任ぜられた旨が鮮于家に伝えられた。(以上三十六齣まで)

三、小説から戯曲へ

では、小説から戯曲にかけて、どのように改められているか、以下これを

イ、忠奸闘争の強調

ロ、宿命的人生観の強調

ハ、登場人物の対称的配置

ニ、読み違えと予想外の筋展開の増幅

の四方面より考察してみたい。

イ、忠奸闘争の強調

戯曲では、登場人物を忠臣と奸臣とに明確に分け、この両者を闘わせ、最終的には忠臣が勝利するというふうに変更されている。

忠臣として登場するのは、鮮于同・俊親子、座主の崩遇時、司礼監の懷恩、兵部尚書の項忠、都御史の王恕であり、これに対する奸臣としては、内閣大学士の劉吉とその娘婿の陳名易、司礼監の汪直、兵部尚書の陳鉞、威寧伯王越らが登場する。但し、汪直・陳鉞・王越の三人は、直接劇中に登場せず、登場人物のせりふの中にのみ出てくる。

歴史上の汪直と言えば、憲宗の寵をうけ、成化年間に西廠を設け、その長として腹心

の陳鉞・王越らとともに、自分に齒向かう政敵を次々と投獄し倒したことで知られる悪名高い宦官である。

尚、上記の登場人物のうち、鮮于同・俊、崩遇時、陳名易の四名のみが虚構の人物⁽⁸⁾で、あとはすべて、成化年間に実在した人物である。

戯曲ではこの忠奸闘争が、第二十二齣で劉吉が浄（敵役）として登場することに始まり、第三十一齣で聖旨により劉吉とその一味が政界から追放されるまで継続して描かれ、中でも第二十二齣の花宴、第二十四齣の扞媚、第二十五齣の探獄、第二十七齣の独餞、第二十八齣の造謀、第二十九齣の雪冤、第三十一齣の鋤奸の各齣に集中して描かれる。これは全三十六齣中約二割を占める。いずれも、崩遇時と鮮于同対劉吉と陳名易の対立構図を鮮明に描いている。

これに対して小説中で今見た戯曲に相当する部分としては、

崩遇時在礼科衙門直言敢諫、因奏疏裏面觸突了大学士劉吉、被吉尋他罪過、下於詔獄。那時刑部官員、一箇箇奉承劉吉、欲將崩公置之死地。却好天与其便、鮮于同在本部一力周旋看覷，所以崩公不致喫虧。又替他糾合同年、在各衙門懇求方便、崩公遂得從輕降処。

と、礼科給事中の崩遇時が憚ることなく諫言し、大学士の劉吉と衝突した為に、劉吉に粗探しをされ、結果詔獄に囚えられたが、刑部主事の鮮于同がこれを救ったというもので、字数にして僅かに百五字にすぎない。しかも、これ以外の箇所では劉吉は登場せ

ず、まして陳名易なる登場人物もない。これでは蒯遇時ないし鮮于同が忠臣で、かたや劉吉が奸臣と描かれているとはかならずしも言えない。そもそも、この小説のテーマが、忠奸闘争を描くことになってない。

ロ、宿命的人生觀の強調

ではこの小説のテーマは何かと言えば、人生における宿命である。心の中では老受験生を馬鹿にする試験官の蒯遇時は、心ならずも三度までも鮮于同を合格させてしまう。ところが、その後これまた心ならずも三代にわたって鮮于同の世話になるという滑稽な話で、鮮于同の科擧及第と出世は前定であるとする。また作中「話本」でよく用いられる「早知富貴生成定 悔却從前枉用心」の七言二句が挿入されている。このように、小説ではすでに人生の前定が強調されているが、戯曲ではそこが更に明確に強調されている。それには第四齣における呂祖仙の七絶詩がひとつの「しかけ」として設けられている。これはその後の鮮于同の人生の予言となる偈のようなものだが、この時鮮于同自身その詩の意味する所が分からないでいる。ところが、最終の第三十六齣に再びこの七絶詩が出てくる。この時すでに鮮于同は百歳になっていた。そこへ蒯遇時が聖旨を携えて鮮于家に来て、その際同の百歳を祝って「天台図」を贈り物として置いてゆく。同がその図を開いて見ると、蓬萊島に集う群仙献寿の図で、うち一人の仙人が呂祖で、その呂祖が高々と一巻の書を掲げている。そしてその書にはなんと飛昇觀で得た七絶詩が書いてあった。鮮于同はこの時はつきりその詩句の意味を解し、その場に居合わせた者達も、皆同の立身出世と鮮于家の繁栄とはすべて前定であったことに驚くことになっている。これを小説と比べれば、より前定を強調するものになっていることは明らかであろう。

ハ、登場人物の対称的配置

戯曲では、以下のキャラクターが増加している。

(老旦) 鮮于同の妻顔氏、(小生) 鮮于同の息子鮮于俊、(丑) 鮮于同の孫鮮于榮、(外) 鮮于同の従弟梁徳、(旦) 梁徳の娘梁窈窕、(小浄) 内閣大学士劉吉の妻鄔氏、(貼) 劉吉の娘瓊真、(丑) 鮮于同と同年の進士陳名易、(小浄) 蒯遇時のどら息子蒯楽、(老旦) 飛昇觀觀主王仙保など、これを小説と比べれば大幅に増えている。これは戯曲の場合短編小説と異なり、前後三十六齣もの劇を展開させるには、筋立てを複雑にせねばならぬ必要が生じ、それ故にそれ相応のキャラクターを増すに至ったものと思われる。

またこれは、明末の戯曲に限らずそれまでの小説にも広く認められることであるが、この三報恩伝奇において殊に登場人物を対称的に配置することに意を用いている。

例えば、蒯遇時による抜擢の恩に対しては、鮮于同と陳名易の態度は対称的で、前者が恩に報おうとするのに対し、後者は恩に背く行為をとる。鮮于俊が上出来の息子なのに対し、蒯楽はどら息子ということで、この二人も対称的に描かれる。また鮮于俊が梁窈窕と結婚するのに対し、陳名易が劉瓊真と結婚することになっていて、これも対称的に配置されている。また司礼監の汪直と懷恩の二人も、前者が奸臣なのに対し、後者が忠臣と対称的に配置されている。

二、読み違えと予想外の筋展開の増幅

小説では、知県兼試験官の蒯遇時が郷試の予備試験たる録科で大嫌いな老人の鮮于同を合格させてしまうのを皮切りに、その後郷試・会試のいずれも自分の意に反してこの男を合格させてしまうことになっている。この蒯公の読み違いと予想外の展開とが滑稽

であり、それがこの小説の魅力ともなっている。

戯曲でも、まずこの小説のプロットをそのまま踏襲している。

つまり第五齣より第七齣までは、刪遇時が自分の意に反して録科で鮮于同を一番に合格させてしまう。

また第十一齣より第十三齣までは、郷試において鮮于同が二日酔いで提出した不満足な答案を、刪遇時は若い受験生のものと勘違いし、結果またまた鮮于同を合格させてしまう。

更に第十七齣より第十九齣までの会試の場面では、鮮于同は郷試の時と同じ札記で受験する予定であったが、試験の前日見た夢に詩経で合格しているのを見て、受験科目を急遽変更する。一方札科給事中に転勤した刪遇時は、会試の試験官を拝命するが、彼としてはもう鮮于同とはかわりたくないという一心から、同僚の試験官に頼んで採点科目を札記から詩経にしてもらう。かくてまたしても自らの手で鮮于同を合格させてしまう。以上いずれも、戯曲は小説と同じである。

ところが戯曲第十九齣では、会試の試験官同士が互いに不正を依頼しあう一段が新たに付け加わっている。会試の試験官となった刪遇時は、それまで大いに目をかけてきた門生の陳名易をなんとしても合格させたい一心から、採点科目をかわってくれた同僚の錢為上の所に行つて不正を頼む。それは、今回札記で受験している者の中に、自分が目をかけた門生がいるので是非彼を合格させてほしい、目印は答案第七篇の末尾が「後世可畏」で結ばれているものだというものであった。するとかの同僚の試験官も、そういうことなら、自分にも詩経で受験した門生で是非合格させたい者がいる、その者の答案

の末尾が「財旺生官（財旺なれば、官を生ず）」であると言う。この二人の試験官のやりとりは、実に生々しい。実は、崩遇時がやってくる前、この錢為上は、次のような独り言を言っている。

從來科場一事、原是為国求賢、関防甚密。但邇年私通關節、習成常套、人々如此、怪我不得。（そもそも科挙は、国家有為の人材をえらぶのが主旨だから、選抜にあたっては厳正さを求められてきた。しかし近年つてや賄賂によつて合否がきまるようになってゐる。みんなやつてゐることで、私だけではない。）

つまり、この錢為上という試験官は、その名前からしてお金を第一と考える試験官であり、彼が合格させたい門生というのも、彼に沢山の賄賂をくれた受験生だったのだらう。ところが次の第二十齣になると、会試合格を喜ぶ鮮于同が登場して、科目を変更して受験したのに、今度もまた自分を合格させてくれた試験官が崩遇時であつたことを知つて非常に驚いている。

戯曲では、このような読み違えはこの他にも見られる。

第二十五齣では、崩遇時は大学士劉吉を批判して詔獄に囚われの身となるが、この時彼は自分を助けに来てくれるのはつきりこれまで目をかけてきた陳名易だろうと思つてゐると、豈図らんや、実際に助けにきてくれたのは、自分が誤つて三度も合格させた鮮于同であつたという箇所や、陳名易が今を時めく宰相の劉家の入婿となり、自らの将来は安泰とばかり先を読んでゐたところ、第三十一齣で司礼監懷恩の上奏により、汪直

の一味に加えられた末に、山東徳洲太平駅での雑役の従事を命ぜられる羽目になるといふ箇所など、いずれも読み違えと予想外の筋展開の例であり、戯曲ではこれが増幅されている。

四、馮夢龍と科挙

最後に、馮夢龍は一体科挙に對しどう考え、どのような気持ちで「老門生小説」を作り、「三報恩伝奇」に手を加えたのであろうか？先にも触れた通り「老門生小説」は馮夢龍が五十一歳になる前に書いたものであり、他方「三報恩伝奇」の方は馮夢龍六十九歳の時の作で、この両作品には約二十年近い時間的隔たりがある。従つて、彼の科挙に對する考え方も年齢によつて変化があつたと考えるべきであらう。

馮夢龍は、崇禎三年（一六三〇）五十七歳の時に貢生となつてゐるが、実にこの時が彼の人生のターニングポイントであつたように思われる。この時貢生になつたといふことは、彼はそれまでずっと生員の身分であつたことになる。この間彼は一体何度科挙にアタックしたのであろうか。実はこの点に關してはほとんどわかつていない。

ところでこの貢生になることについては、馮夢龍自身すでに小説中で主人公の鮮于同の口を借りて、貢生から役人になる道を科挙によるそれと比べて前途に限りがあると言つて滔滔と批判してゐたのである。にもかかわらずこの時自ら貢生におさまつたのは何故であらうか。

思うに、この時彼なりに現実と妥協したのではあるまいか。おもしろいことに、小説

中の鮮于同もやはり五十七歳の年に進士になるという奇妙な年齢上の符合がある。では、それまで批判してきた貢生になぜおさまったのか。これも推測する他はないが、やはり第一に五十七という年齢を考えてのことと思われる、たとえその後進士に選ばれたとしても、役人として活躍できる期間は知れていると考えたのではあるまいか。第二にやはり生活苦があり、この時一定の収入を得る必要があったのではなかったか。これはよく引用される記事であるが、袁于令が「西樓記」という戯曲を作って馮夢龍の批評を乞うた時、馮は「錯夢」の一齣を付け加えた方が良いと言って、袁より百金を受け取った話がある⁽⁹⁾。この時馮の一家は食うに事欠く状態であったという。この話は、よく馮の樂天的性格を語るエピソードとして引用されることが多いが、この時実際に馮家の生活は窮していたのではないか。高洪鈞氏の「馮夢龍年譜⁽¹⁰⁾」によれば、馮が袁の戯曲に手を加えたのは、崇禎三年ではないかと推定されている。もしそうだとすれば、それは正に馮が貢生となった年の話ということになる。

ところで、馮夢龍が五十七歳になるまでただ進士になる為の八股文の勉強ばかりしていたのではけつしてなく、その年になるまで、彼は自から著述編纂した本のその大半を世に出している。まず、民歌を収集した「山歌」「掛枝兒」、戯曲の創作ないし改作としては「墨憨齋定本伝奇」、文言小品文を収集した「太平広記」「古今譚概」「智囊補」「情史」「笑府」、短編白話小説集としては「三言」、長編白話小説の増改訂としては「新平妖伝」「新列国志」などがあり、以上の他に注目されるのが、「麟經指月」「春秋衡庫」「春秋定旨参新」「綱鑑統一」といった科挙受験の参考書の存在である⁽¹¹⁾。中でも前三書がすべて「春秋」に関するものであることが注目される。小説中の鮮于同は、「礼記」で郷試

を受験するが、或いは馮夢龍自身は「春秋」で科挙の受験を繰り返していたのかもしれない。

万曆四十六年（一六二〇）馮夢龍四十七歳の時に出版された「麟經指月」の冒頭には、彼の弟馮夢熊の書いた序があり、その中に、

余兄猶龍、幼治「春秋」、胸中武庫、不滅征南。居恒研精覃思，曰「吾志在春秋」。牆壁戸牖皆置刀筆者、積二十余年而始愜。

とあることからすれば、馮夢龍が二十代の頃から必死に「春秋」を勉強していたことが想像される。恐らく馮夢龍は五十七歳になるまで、上記の著作物を世に送り出しつつ、小説中の鮮于同が言っているように、「進士に及第しない限り、とても役人なんかにならないよ。むしろこのまま老学生で一生を終えたほうがましだ。」と考え、科挙の受験を繰り返していたのではないか。

では、畢魏の戯曲に筆をとった六十九歳の時の彼は、科挙に対してどう考えていたのだろうか。これもやはり、「三報恩伝奇」の序にその一端を見ることができるよう思われる。

至伝中科場仮借、或言稍觸時諱。夫仮借之得失、即命為之。況礼義不愆、何恤人言？倘為鮮于不為名易、即逆取而順守、吾猶謂商周之不異唐虞耳。若執此為謗為嫌、是未通於命、又安足与言天乎？

伝奇の中で科場の仮借（恐らくこれは、第十九齣における試験官同士が自らの意中の受験生を合格させたいが為に、互いに答案の目印を教えあうことを指すと思われる。）に書き及んでいるが、これはいささか憚られることだ。しかしこの仮借の損得も、所詮運命がこれを決するものだ。まして（受験行為自身）礼義にたがわなかったのであれば、（その結果について）人のうわさなど気にすることはない。もしこの行為が鮮于同の為に陳名易の為でないなら、これぞ「天下を取る時は、道に逆らった方法を用いても、天下を守る時には、道に従う」（「史記」陸賈伝中の語）というものである。私は、殷周革命も、堯から舜への政權委譲となんら変わらぬと思っている。もしこの科場の仮借を執つてこれを謗ったり嫌ったりするならば、（その人は）まだ運命というものに通じてないのである。どうしてそのような人とともに天のことを語ることができようか。

つまり科挙の可否は運命であり、その運命の前では試験官の愚かしい小細工も無力だと言っているのである。これは馮夢龍が亡くなる四年前の考え方である。すでに人生の甘いも辛いも味わい尽くした馮夢龍は、晩年にあたってついぞ生涯科挙の合格できなかったのも、この序に見えるように、すべて運命と考えていたのではあるまいか。

まとめ

以上見てきたところをまとめると、「老門生小説」と「三報恩伝奇」について、小説か

ら戯曲へとどのような改作がなされているかと言えば、一、忠奸闘争の強調、二、宿命的人生観の強調、三、登場人物の対称的配置、四、読み違えと予想外の筋展開の増幅の四傾向を見ることができた。

一方馮夢龍の一生は、この小説や戯曲で扱われている科挙と深く関わった人生だった。中年の頃に書かれた「老門生小説」が奇妙にも彼の後の人生を暗示するものになっている。小説では主人公が五十七歳で進士になるが、馮自身その五十七歳でそれまでの科挙による役人を断念して貢生となっている。

今回は、明末に出現した伝奇のうち話本小説に題材を取材するものの改作傾向について、馮夢龍が書いた「老門生小説」と畢魏原作の「三報恩伝奇」についてこれを考察してみたが、その他の明末の戯曲作品に同様の傾向がみられるかどうか、今後の課題としたい。

註

(1) 馮夢龍の編した口語体短編小説集「喻世明言」「警世通言」「醒世恒言」の総称。本稿ではそれぞれ「明言」「通言」「恒言」と略称する。

(2) 李玉「眉山秀伝奇」の跋文中の語。(「西諦書跋」文物出版社一九九八年刊、頁六二六)

(3) 無碍居士とは、馮夢龍のこととする説がある。

(4) 北京図書館蔵本。後に「古本戯曲叢刊」二集に収められる。

(5) この他に「曲海総目提要」巻二十「非非想」劇の条に、「海寧人查繼佐撰。繼佐字伊璜。崇禎癸酉舉人、才名甚著、以考廉終。所著有『非非想』及『三報恩』、流伝於世。云々」とあり、

査継佐にも「三報恩」劇があったと見えるが、これ以外の戯曲書目に査継佐に「三報恩」劇があったことは記されておらず、なによりもその作品自体が残っていないので、本当に老門生小説を改編したものでしょうかともわからない。郭英徳氏は、この「曲海総目提要」の記事は誤りのようだとし、査継佐に「三報恩」伝奇が存在したことを認めていない。（『明清伝奇綜録』巻四畢魏「三報恩」の条）

(6) なによりも異なるのは時代背景で、老門生小説と三報恩伝奇の方が明の正統年間より弘治年間にかけての話とするのに対して、玉瑒縁伝奇の方は明の万暦年間を背景として、うちに万暦の三大征の一つに数えられる播州の土豪楊応龍の反乱に言及されている。登場人物名も、例えば、心ならずも三度も鮮于同を合格させる興安県知県は、三報恩伝奇は老門生小説と同じく崩遇時であるが、玉瑒縁伝奇の方は崩誠と少し異なるし、三報恩伝奇の方は小説と同じく、崩遇時が礼科給事中として時の宰相劉吉を憚ることなく弾劾した為に投獄されるのに対して、玉瑒縁伝奇の崩誠は、会試で落とされた受験生の牟奎より恨まれ、折から発生した楊応龍の反乱に内応したという根も葉もない讒訴により投獄されることになっている。そしてその後、主役の鮮于同が四川巡撫として、この楊応龍の反乱を平定することになっている。

また小説では、鮮于同が郷試では礼記で受験するも会試では詩経と受験科目を変更したのは、会試受験の直前に見た夢である点、三報恩伝奇も同じだが、玉瑒縁伝奇でも会試で受験科目を変更するものの、その科目は、郷試では春秋、会試では易経に変更と少し異なり、またその変更の契機となったものも夢ではなく、金山における周顛仙という者の導きであるとする。

(7) 岩城秀夫「中国戯曲演劇研究」（創文社 昭和四十八年刊）第五章戯曲構成の技法と理論頁三

七三参照のこと。

(8) 鮮于同には「同じき者すくなし」が、崩遇時には「早くに時にあう」が、陳名易には「名をなすことやすし」が、それぞれの名前に込められている。

(9) 清の楊恩寿の「詞餘叢話」巻三、楮人穫「堅瓠續集」巻二、焦循「劇説」巻三等に見える。

(10) 「馮夢龍箋注」(二〇〇六年天津古籍出版社刊)所収。

(11) 「四庫全書総目提要」巻三十で「春秋衡庫」について「其書為科挙而作」と見える。